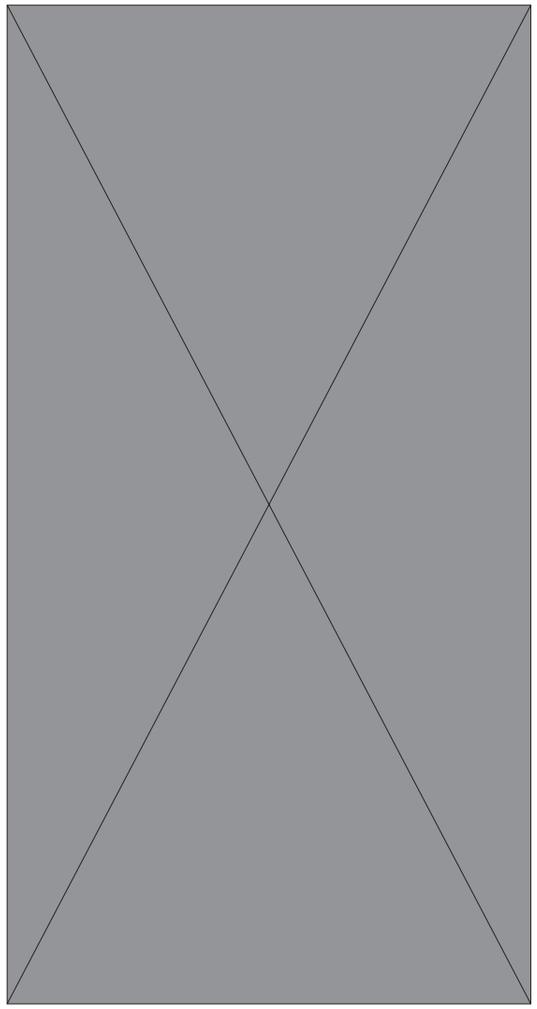
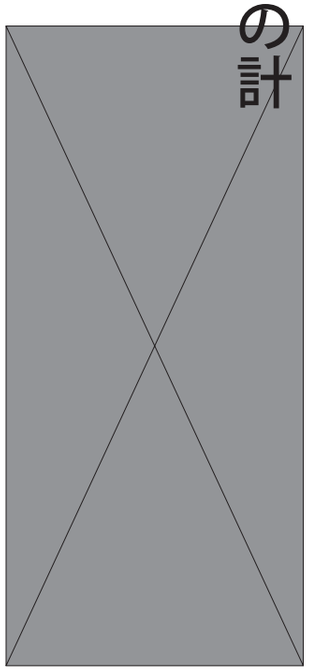
江戸「人間教育」の知恵

【第二回】藩主が綴った人生七〇年の計

往来物研究家　小泉　吉永



幼子を慈しむ（家職要道）



養生の灸も親心（前訓絵抄）

江戸時代には人生の生き方を説いた生涯指針とともに、年代別教育論が数多く登場した。特に著者が多彩な点は注目すべきで、大名、漢学者、漢詩人、医者、経世家、仏僧、神官、国学者、心学者、故実・礼法家、書家、書肆、往来物作者、読本・浄瑠璃作家なども含まれる。江戸時代は身分・職分を超えて人間教育が模索された時代であり、このような現象は世界に例がない。

今回は、尾張藩初代・徳川義直の啓蒙的著作『初学文宗』に人生を学ぶ。

江戸時代に一般化した「五計」

中国・宋代の朱新仲の「五計」という言葉をご存じだろうか。

日本では、庶民に篤く信奉された貝原益軒が正徳二年（一七一二）に『家道訓』で紹介したことにより、「五計」が急速に一般化したようだが、同書では「五計」をこう説明している。

一〇代「生計」＝父母の教えに背かずに生きる

二〇代「身計」＝学問・諸芸を身につけ、身を立てる準備をする

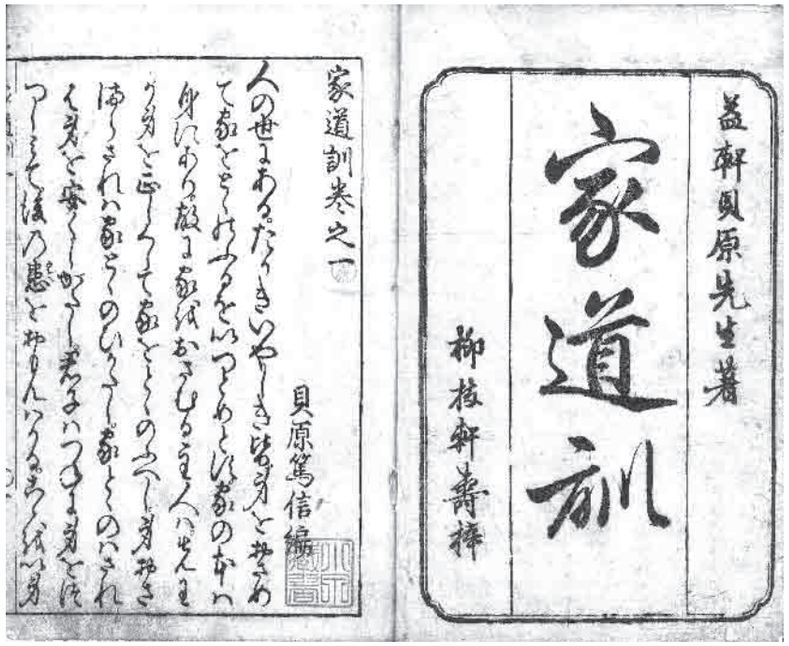
三〇～四〇代「家計」＝家業を営み、家を保つ

五〇代「老計」＝子孫を世間に通用するように育てる

六〇代「死計」＝死期に臨んで後悔しないように死後の準備をする

その上で、益軒は「五計は誰もが実行できる計であり、これが実行できない者は怠慢で、生きる力を持たない人間だ」と述べたが、現代人にとって「五計」は容易なことではない。

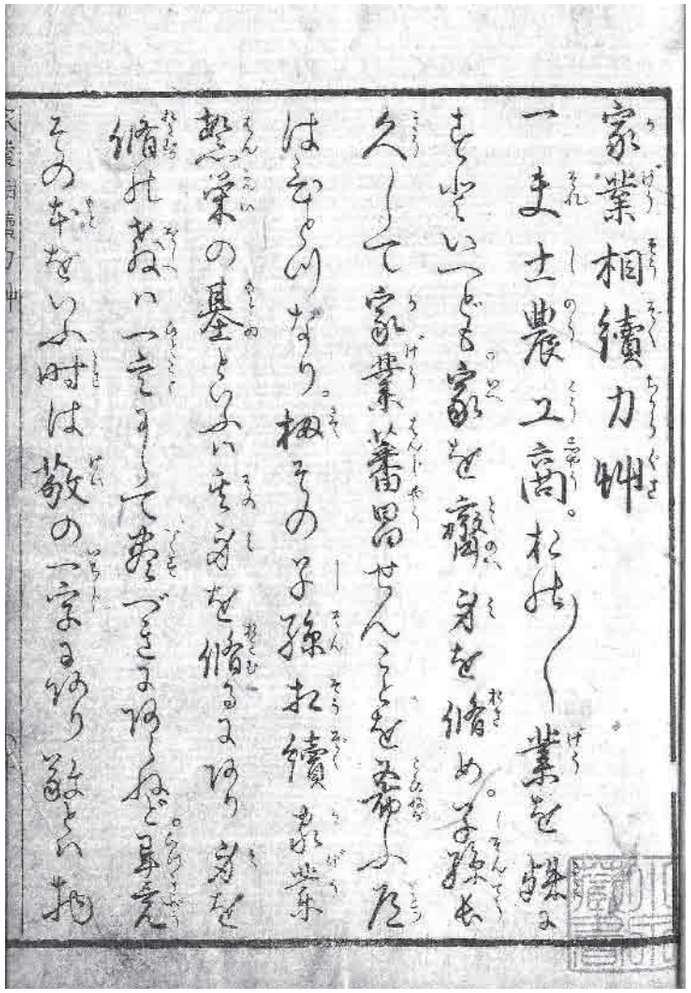
このうち「死計」については、土屋巨禎が寛政



『家道訓』

六年（一七九四）刊『家業相続力艸』で、その具体的内容をこう説明した。

子孫が相続し、家が長く繁栄することを願うなら、陰徳を積むことが大切。心に仁を保って善い行いをし、神仏を敬って先祖を祭り、貧乏人には支援し、飢えた者には施し、年寄りを助け、幼児を可愛がり、病人をいたわって、他人の過ちを諫め、みだりに生き物を殺さず、落とし物は持ち主を探して返し、そのほか、薬を施し、道をあけるなど小善を努めて怠らなければ、家業繁昌や子孫長久は疑いない。


『家業相続力艸』

要するに「死計」とは「積善の家に余慶あり」をモットーに生きることである。

九九と商人の生き方を同時に教えた『九々往来』

「五計」のような生涯指針は、裏返せば年代別教育論になる。年代別教育論は江戸時代の育児書や読み書き教科書（往来物）にしばしば見られ、例えば、幕末から明治初年に会津地方で使用された『九々往来』は、九九の読み声を交えつつ理想的な商人の一生をこう記す。

凡そ子供二々が四、二三が六の頃より行儀を教え、二四が八、二五十より手習い・学文に遣し、二六十二、二七十四迄厳敷くいたし、二八十六、二九十八より商売見習いに外へ遣し置き、三三が九、三四十二、三五十五、三六十八、三七廿一、三八廿四、三九廿七の頃迄人中に差し置き、四々十六、四五二十、四六廿四、四七廿八、四八三十二、四九三十六の頃手元へ引き取り嫁をとり、五々廿五、五六三十、五七卅五、五八四十、五九四十五より商売に他国へ遣し、六々三十六、六七四十二、六八四十八、六九五十四より宿に居り、七々四十九、七八五十六、七九六十三にて安堵の隠居振舞いも賑々敷くこれを相済まし、八々六十四、八九七十二、九々八十一、老いの楽しみに名所旧跡見物し、実に此の上や有るべきと万々年も栄え給うべし。穴賢。

すなわち、四～六歳から行儀作法、八～一〇歳から手習い・学問を始め、一四歳まで厳しく育てた後、一六歳以降は他家で奉公修業し、二〇代に実家の店に戻って結婚、四〇代から他国商売の経験を積み、五〇代で店の経営を任され、六〇代で隠居するというものである。往来物は全文を丸暗記するほど徹底的に反復学習されるのが常だから、ひとたび『九々往来』を学べば本当に一生の指針となった。

江戸時代の寺子屋風景（和田耕斎作、松川半山画『闇路指南車』弘化３年〔1846〕刊）

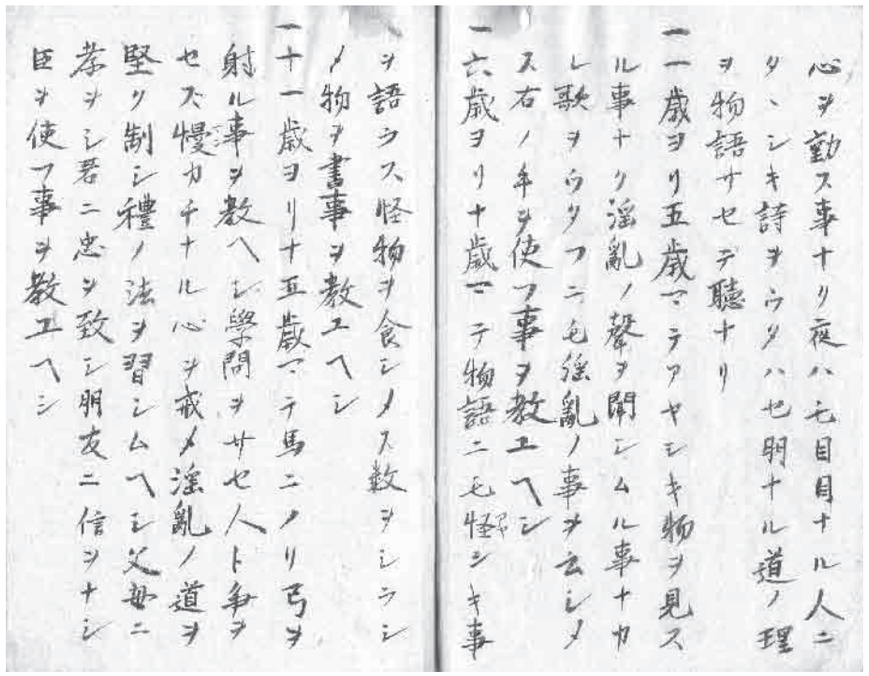
考えてみると、三〇〇字程度の短文で「九九」と「生涯指針」を同時に教え込む趣向は脱帽ものである。

殿様が領民に説いた人生七〇年の計

江戸時代の年代別教育論は、様々な身分・職分で展開した点が大きな特色で、この連載でも順次取り上げるが、今回は、大名が書いた点で異色、かつ、最も早い年代別教育論である『初学文宗』を紹介する。

著者は徳川家康の第九子で尾張藩初代藩主の徳川義直（一六〇〇～五〇）で、慶安三年（一六五〇）に書かれた。数少ない伝本間でも多少の異同があるが、筆者蔵の明和六年（一七六九）筆、白木興常重写本の冒頭は次の如きである。

夫レ学ノ事ハ難キニアラズ。人生ノ日々ニ用ヒ行フ処、是皆学ノ道ナリ。今ノ人、此理ヲ知者少シ。学問ト云ヘバ、愚ナル者ノ成ベキ事ニアラズトテ、聞ベキ事トモセズ。故ニ愚ナル者ハ弥愚ニシテ道ヲ知ル事ナシ。我、是ヲイタミ思フ故ニ、人初テ生レシヨリ七十以上マデノ間、心ヲ正シ身ヲ修メ、国家ヲ治メ、其外、官職、礼法、軍旅、葬（祭）ニ至マデ仮名ヲ以テ是ヲ書付ケ、一巻ト成シテ是ヲ『初学文宗』ト名付ク。蓋シ初学ノ人ヲシテ大道ノ一端ヲ知シメント思フ心也。


『初学文宗』

すなわち、「学問は決して難しいものではなく、日々の生活が全て学問の道である。だが、愚者には学問は無縁とする偏見のため、愚者は学ぼうとせず、ますます愚かになって道から遠ざかる。これが残念でならないため」本書を著したとする。これに続けて、胎教から七〇歳に及ぶ生涯指針が登場する（以下は要旨）。

▽**妊娠中**＝行住坐臥に気をつけ、珍しい物や怪しい物を食べず、怪しい色を見ず、淫乱の音を聴かず、心を動揺させず、夜は正しい詩や道理にかなった物語を聴く。

▽**一～五歳**＝怪しい物や淫乱な音を見聞きさせない。淫乱な歌を禁止し、右手を使うことを教える。

▽**六～一〇歳**＝怪しい物語を聞かせず、怪しい物を食べさせない。数字や読み書きを教える。

▽**一一～一五歳**＝弓馬の道を教え、学問をさせる。人と争わず、傲慢な心を戒め、淫乱を堅く戒め、礼法を習わせる。父母への孝、主君への忠、朋友への信を教え、家臣の使い方を教える。

▽**一六～二〇歳**＝衣服を飾らず、正直者と交際し、邪佞の人に近付かない。奇怪を好んだり、古来の教えを批判したりすることを禁ずる。特に禅宗の信仰を禁ずる。

……（中略）……血気盛んな年頃で些細な事から過ちを犯しやすいので気をつける。遊山翫水の楽しみ、人を翫ぶこと、酒の多飲を禁ずる。

▽**二一～三〇歳**＝身を正し、道理を弁え、人の言葉を吟味し、悪へ近づかぬように気をつけ、善言を真摯に受け止め、人の諫めに腹を立てない。とにかく善悪の弁えに徹し、私欲・物欲・人欲に心奪われぬようにせよ。

▽**三一～四〇歳**＝万事一通り学び終える年代のため、必ず傲慢の心が生じる。高慢の心を抑え、ますます道理を悟って身を修めよ。

▽**四一～五〇歳**＝人生の盛りなので、十分に慎み悪名を取らぬように注意せよ。

▽**五一～六〇歳**＝老年に入っても学問を続け、一事・一言でも人の教えを学ぶよう

1/3 広告

（資料）『初学文宗』『和俗童子訓』『小学』の年代別教育論（教育内容）

年　齢	初学文宗　1650年	和俗童子訓　1710年	小　学　1187年
1-5歳	【1-5】怪しき物・淫乱な音の禁止／右手使用	【1-5（男女）】善事を見聞きさせる／好みや習いを選ぶ／淫欲・淫楽・浪費・無益な遊芸の禁止（無害な遊びは自由）	【1-5（男女）】子守・侍女等の吟味／右手使用／男女に適した返事
6-10歳	【6-10】怪しき物語・怪しき食物の禁止／数、読み書き	【6（男女）】数・方角／素質により6～7歳より仮名の読み書き、往来物／尊長への礼、尊卑・長幼の別、言葉遣い 【7（男）】男女の別（席・食器）／礼法、仮名の読み書き、読書 【7（女）】仮名・漢字、古歌（風雅の道）／初めは名数・短い語句、その後『孝経』首章、『論語』学而篇、『曹大家女誡』等の読書 【8（男）】礼儀（起居振舞、尊重・客への応対、応答・言葉遣い、給仕方、食礼、茶礼等）／門戸出入・着座・飲食時の年長者への礼／わがまま禁止／漢字（真書・草書）／習字（能書による指導・大字から練習）／短い語句の暗誦／才能により8～14歳で『小学』『四書』『五経』等の読書 【10（男）】外師による五常・五倫の概要、聖賢の書／10歳から『小学』『四書』『五経』の読書と文武の芸 【10（女）】家庭内での紡績・裁縫／小歌・浄瑠璃・三味線等禁止／風雅の道	【6（男女）】数・方角 【7（男女）】男女の別（席・食器） 【8（男女）】礼儀／門戸出入・着座・飲食時の年長者への礼（徳行の初歩として長者への謙譲） 【9（男女）】月日の数え方 【10（男）】外師・下宿による文字・算術・作法／絹服禁止 【10（女）】家庭内で女師による温和・柔順（婉娩聴従）の躾／婦功（紡績・裁縫）・祭祀・礼の補助
11-15歳	【11-15】馬術・弓術／学問による徳性涵養（人との争い・慢心の禁止）／淫乱禁止／礼法／忠孝、朋友の信、家臣を使う道	【15（男）】義理中心、修身・治国の道 ＊20歳迄に『小学』『四書』等の大義に精通	【13（男）】音楽・詩の読誦、勺の舞 【15（男）】象の舞・馬車御法 【15（女）】成人（笄着用）
16-20歳	【16-20】華美な衣類の禁止／正直者との交際（邪佞の人を避ける）／奇怪事・邪道・禅宗の禁止／遊山翫水・飲酒の制限	【20（男）】幼心を捨て、成人の徳に従い、広く学び、篤く行う	【20（男）】元服／成人の礼（生活規範・国法・慣習法）／大夏の舞／孝弟実践／知識・見聞の吸収 【20（女）】結婚（喪中なら23歳）
21-30歳	【21-30】身を正し理を明らかにする／人の言葉を吟味し悪事を避ける／善言・諫言に従う		【30（男）】結婚／公務担当／自由に学び、良友と交わる
31-40歳	【31-40】慢心抑制／道理を悟り身を修める		【40（男）】仕官（政治に関与）
41-50歳	【41-50】悪名を取らぬように注意する		【50（男）】一官の長に任命される
51-60歳	【51-60】学問を継続		
61-70歳	【61-70】差し出口・不適切な発言禁止　＊70歳で公職辞退		【70（男）】官職を辞し隠居

に心懸けよ。

▽**六一～七〇歳**＝物事に差し出がましくなり、時代に合わない事を言い張りがちなので十分慎む。物忘れしやすいので国政に関わってはならない。君主の命令ならば、老い耄れている点を十分弁え、慎重に行動せよ。七〇歳は公職を辞退すべき年齢である。

以上には『小学』(1)などの影響も見られるが、独自の記述も少なくない。ちなみに、貝原益軒の「随年教法」（『和俗童子訓』）と比べると（**右頁資料参照**）、『初学文宗』の次の特色が浮き彫りになる。

①誕生前の胎教から隠居するまでの全生涯の基本的心得を説く

②学習内容の詳細には触れず、生涯学び続ける重要性を強調

③奇怪・異様・淫乱・邪道なものを遠ざけ、善なるものを志向

『初学文宗』は軍事・治国・官位など庶民とは縁遠い記述も含むが、基本的に万民に対して綴られたことは序文からも明らかである。義直は「日々の生活こそが学問」とし、徳性を養う人間教育こそ学問の本道であるとした。人間教育には始まりはあっても終わりはない。領民の全てがそれぞれの立場から「生活即学問」という意識で学び続けることを期待したのである。

義直は、本書の執筆後間もない慶安三年五月七日、江戸藩邸で没した（享年五一）。残念なことに、『初学文宗』は秘蔵され、大正期以前に世に出ることがなかった。だが、本書の年代別教育論は益軒よりも六〇年も早い先駆的な年代別教育論であり、何より藩主自らの啓蒙的著作として特筆すべきである。

現代人よりも生々しい死に直面していた江戸時代の人々にとって、年代別教育論は重要なテーマだったに違いない。しかしながら、現代でも、自殺、脳死、尊厳死、終末期医療、出生前診断、代理出産など、生死に関する様々な問題の中で「死生学」への関心がますます高まっている。江戸時代の年代別教育論の数々は、現代人の死生観再考にも重要な示唆を与えるであろう。

【注】

(1)『小学』＝中国宋代に朱熹が門人・劉子澄（りゅうしちょう）らと共に編纂した修身書。1187年成立。日常の生活心得や礼儀作法、格言、忠臣・孝子の伝記などを古典から抜粋したもの。

『和俗童子訓』